

教育科学研究会通信

京都(関西)教科研例会案内 355号

9月号



京都ラーメンの激戦地 一乗寺から

日時 2022年9月17日(土) pm6:30~

場所 乙訓教育会館 ZOOM同時開催

内容 第338回9月京都教科研例会

提起

幼少期からの性教育と子どもの尊厳

—教育9月号 第1特集から—

渡部太郎(京都教科研代表)

9月例会は「教育」9月号第1特集の検討です。渡部新代表の提起です。

みなさんの参加をお待ちしています。

ZOOM参加希望の方は申し込みをお願いします。URL送信します。

355号目次

1 9月例会案内	1
2 8月例会の報告	3
3、わたしの研究ノート(18)	8
4、新連載企画の紹介・掲示板活用について	12
5 編集後記・ニュース	13
資料 新刊書籍の紹介『市民を育てる「公共」』	

教科研副委員長

吉益 敏文

教科研大会に参加されたみなさん、それぞれの参加の形態が異なると思いますが3日間 ご苦勞様でした。正確な数字はわかりませんが3日間の集会で367人以上の方が参加されました。3月集会と6月のプレ集会も100名以上の方が参加されました。コロナ禍の困難な中、このオンライン東京集会の成功に尽力をつくされた事務局長の池田副委員長 大会実行委員長の佐藤広美委員長や事務局のみなさん、大東文科大学の関係者のみなさん、全国から組織され参加された45名の実行委員のみなさん、ボランティアの方々、お名前をひとりひとりあげることにはできませんが、8回の実行委員会、それに倍する事務局会議、今後の教科研の大会開催の方向性、可能性を示して頂いたと思います。お礼と感謝を含めた大きな拍手を送りたいと思います。 本当にありがとうございました。

さて大会の成果、感想は終わりの集いで素敵な感想が語られました。私は簡単に自分のかかわった分科会を含め3点感想を語らせていただきます。個人的な感想で重複する所もありますがご容赦ください。

ひとつは1日目の岡野さんの講演です。まとめて岡野さんのお話しをお聞きしたのは初めてですが大変に示唆のとんだ内容でした。ケアの5つの倫理、教育とケアの関係、何よりも想像力が大切だと結ばれ所が印象に残っています。さらに岡野さんの文献を学ぼうと思いました。

2つめは能力・発達・青年期・子育ての3つの合同分科会です。若き船津さんが終わりのつどい詳しく発言されました。私は能力・発達の分科会に30年以上かかわっていますが、合同開催にして3回目です。回数を重ねるにしたがって充実し、楽しくなってきたと感じています。不条理な世界を描いた『ごんぎつね』を子ども達はどう読んだか、在日の若者たちの「せつなさ」を高校生はどう理解し行動したのか、沖縄で平和の問題を大学生にどう教え、学びを演劇の中でどう深めのかという3つの報告が重なりあい、60回大会の、暴力のない平和。平等な世界を子どもと創るというテーマの問いに深くかかわったように思いました。

3つめはフォーラムBの勝田守一から何を学ぶかに参加した感想です。沼尾さんが報告されましたが、私も勝田の生き方から、いまどういう思想が大切なのか勝田教育学をさらに深く学びたいと思いました。勝田の「魂において頑固、心において柔軟、精神において活発」という教科研集会に渾身の力をこめて送ったメッセージの意味をさらに深めてみたいと思いました。3つに共通するものとして、自らが他者に対する想像力をいかに豊かにすることができるか、良かれと思ってした行動が相手に負担や苦痛を強いているということをいかに自覚するか、そのことの大切さを学んだように思いました。

3日間の大会は今日で終了ですが共に学んだことを、それぞれみなさんがじっくりと熟慮していただいてこれからの実践研究運動に活かしていただければと思います。

コロナ禍と暑さが続きます。どうかみなさん お身体ご自愛ください。

また来年どこかでお会いできることを祈念しまして、簡単ではありますが閉会の挨拶といたします。ありがとうございました。

1、夏の大会報告あれこれ(教科研大会に限らず)

例会前に芦田さんと佐藤さんからコメントをいただきましたので掲載します。当日は画面共有しながら報告されました。大会概要スケッチということで、吉益の閉会挨拶も冒頭 掲載しました。

フォーラム A のこと 芦田さんから

近未来社会において、日本では「公教育の溶解」が起こるといふ趣旨の山本、堀内両先生の報告、2 回目です。2 回とも聞きました。今回も刺激的な報告でした。

ただ二度目ともなると、科学技術＝AI と通信技術を使って国民全員の個人情報管理統制が可能となるということの危険性を、どう克服するのかを討議する方に重点を移してはどうなのかと思う次第です。でも、「現在、教育の国家統制がいきわたった」という認識を前提とするなら、私なぞ自分から克服案を提案する能力はないと弁解するしかない。AI 中心の通信技術と個人情報管理統制技術は道具にすぎないので、権力企業に支配されるのではなく、勤労大衆が自治的に管理統制できるようにすべきという原理原則は、重々承知していることなのでその範疇を超える、具体的取り組みを提案いただくことが、大気気温上昇を食い止めることと同様に緊急重要であるとは思いますが。そこで、回りくどいことは承知の上で、両先生は日本の公教育関係者にどうするつもりやねん、科学技術について勉強しろよと恫喝することが、当面の変革への手立てで、このような報告をされているのかと思う次第です。しかしその意図は伝わっておらず、参加者は戸惑うばかりということではないのかなあ。やはり、具体的に変革のための「研修ポイント」、「運動ポイント」を行政労働者向け、教師向け、保護者向けに具体的に提案いただくわけにはいかんものではないでしょうか。

(芦田さんから ZOOM 環境を考慮して事前にメモをいただきました。ありがとうございます)

佐藤さんから

第 60 回教科研全国大会⑩教育課程と評価分科会参加個人総括

(2022.8.20 京都教科研第 337 回例会) 佐藤年明

●分科会基調報告 (本田伊克)

「今年度は、現在進行している教育課程と評価をめぐる動向や、教育の ICT 化による各地の教育現場への影響を俯瞰的に捉えつつ、議論を一步前に進めていきます。現在の厳しい状況のなかで日常的に取り組まれている教育実践に学びながら展望を探ることを課題にします。

国の人材育成政策による教育課程と評価の改変

教育現場の「3つの渦」

- 1)改訂学習指導要領(「主体的・対話的で深い学び」)の完全実施
- 2)コロナ対策を契機に拙速に推進される GIGA スクール構想
- 3)2021 年1月の「令和の日本型学校教育」答申(ここで新たに示される「個別最適な学び」「協働的な学び」)

高校学習指導要領完全実施：文科省と内閣府や経産省との間に緊張や不整合を孕む様々な施策の総合的な実施過程において生徒の学ぶ力を育てる教育課程・評価の在り方が歪められている。

教育の ICT 化にいかなる授業観で向き合うか

- ・授業の ICT 化にどう向き合うかは、教師の授業観が問われる
- ・デジタル教材や Web 検索に依存すると、与えられた情報の中から選択するだけの、保守的な授業になりかねない
- ・ICT はあくまで手段として、子どもたちの思考を深める、ICT で調べる活動を媒介に異なる知識や経験、学びの方向性やスタイルを持つ子どもたちの学び合いにつなげようとする試みもある

子どもの豊かな学びを生み出す授業と評価

- ・典型的な優れた実践に学ぶことは大切
- ・日常的に行なわれている実践から今の状況の中で私たちが教育課程と評価について学ぶべき課題が見えてくるのではないか
- ・学習者が問題の本質に迫り新たな認識へと思考を発展させていくような学びをどう創るか

●第1報告：梅原利夫「高校教育に流入する三つの渦巻きと実践の課題」

一 子どもの権利保障と一八歳成人待遇がともに尊重されず

「いまだに教育現場では高校生を、人格を有した権利主体として尊重しない姿勢が残存しているのではないか。」

⇒選挙権に加えて飲酒・喫煙を除いて成人年齢の18歳への引き下げが実施されたこと、高校第10期学習指導要領が今年度から学年進行実施に入ったこと等からとりわけ高校生と高校教育・高校教育課程に注目するのはわかるが、小中を含めた12年間全体を俯瞰して教育課程問題を捉えること必要だ。

二 三つの渦巻きと学びの定型化

分科会参加当時、よく聞いていなくて誤解していた。レジュメを見ると梅原氏の言う「三つの渦」とは、基調報告にもある三つである。一方、本節の「4. 激流のなか『定型化された学び論』への求心化」では、以下のような別の三分類がなされている。

「以上の経過を経て、学校内部特に高校現場に押し寄せている「定型的な学び方」は次の三タイプがある。

A 主体的・対話的で深い学び、B 探究的な学び、C 個別最適な学びと協働的な学び

それぞれの学び方が強調される文脈が異なり、その背景を自覚して把握しておく必要がある。A では異常に『主体的な学び』がすべてに強調され、それが評価の観点にも入った。B では新教科書の検定過程を通して高校教育全体がこれで覆われ、C はかえってアイマイになってしまった、つまり前者が AI による指導で後者が教員による指導で、その両方をめざすのが当初の本音であ

ったのにそうは言えず、個別最適な学びも機器だけに頼らずに子ども自身が学びを調整して行うんあんどという、折衷的な解説が入るようになった。

このような文脈の異なる三つの『学び方』が、一気に指導と学びの領域に流れ込んでいる。これでは混乱が起きるのは必然である。結局 ABC は、学校や教員が時々の授業で何を求めるかで、使い分けがされていく可能性がある。混乱のなかでいずれにも共通しているのは、形式化され(マ)学びのパターン導入であり、評価されることを意識した『期待される学び』への生徒による『過剰な適応』の姿なのではないだろうか。」(下線は梅原)

三 新教育課程実施下の学校 (略)

四 高校教育の再編構想と国家の人材育成策 (略)

五 高校教育実践の課題 (略)

※すいません、高校教育の細かい問題に関心がないので、省略します。

◎佐藤のチャット投稿 ⇒議論では取り上げられず

本田さんが最初に政策側もまとまっていなままに降ってくるという話をされていましたが、そこを解いていくためには政策立案の根拠となる理論(それがいいのかないのか)を探る必要があると思います。

自分ではまだそれが序の口しかできておらず、「めざす社会像」の部分からとりかかったところですが、

●1996 中教審答申では、まだ 21 世紀の社会像が明確に打ち出されておらず、「生きる力」の定義の枕として「いかに社会が変化しようかが」とある意味「どうなっても生き延びよ」と投げ出している気味もあります。しかし、

●2016 年答申では 2030 年の社会像を打ち出し、soziety5.0 の語こそまだないが「第4次産業革命」の語が見られます。この 20 年の間に国家はそれなりに自信を持って示せる「社会像」を獲得したとも受け止められます。

このあたりの動きを丁寧にとらえていく必要があります。本当に「ばらばらに降ってくる」のか、それとも周到に計画されたことなのかを見極めるためにも。

◎佐藤のチャット投稿 ⇒まとめの討論で短く発言

2010 年代後半以降の教育課程に係る政策文書公開は、は冒頭に触れられたように、経産省と文科省のせめぎ合いもありながら「ばらばらに降ってくる」(従って現場のばらばらに対応するしかない)ものなのか、それとも周到に準備されて系統的に提起されているものなのか？ 眉唾の、インチキなものなのか、それとも理論的にもきちんと検討して対応する必要があるものなのでしょうか？

そのこと自体を教育課程を研究する者が検討し、意見を交換する場があってもいいと思います。個人としては対応しきれません。

◎発言の中で追加したこと

(記憶に頼っているので不正確ですが)

・Society5.0の初出は私見の限りでは「第5期科学技術基本計画」(2016.1.22)で、その意味については註記欄で「狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会に続くような新たな社会を生み出す変革を科学技術イノベーションが先導していく、という意味を込めている。」という末尾がよくわからない説明をしているけれども、造語なのか出典があるのか明記していない。ドイツ出自のIndustry4.0のパクリかとも思われるがはっきりしない。

・梅原氏の報告後の発言＝「自己調整能力が突然登場した。出典はアメリカの学習心理学。Zimmerman『ハンドブック自己調整学習』』という情報を興味深く聴いた。この伝で行けば、梅原報告の「三タイプ」(発言ではここを間違えて「三つの渦」と言いました)のそれぞれにも何らかの理論的根拠があるのだろうか。

・チャットにも書いたようにこうした教育課程をめぐる理論問題は、一研究者の力では情報収集も分析も限界がある。教科研の分科会がそれをするのか、それとも民主教育研究所とか全教とかがするのかどうか分からないが、教育課程関係の研究者の共同討議が必要であると思う。

【個人的総括】

実践報告にも興味深いものがあつたんですが、長くなりすぎるので省略し、理論問題に限定して書きます。

教育政策、特に教育課程関連政策については、大変な状況になってきているという認識を持っています。1998年の第7(高校8)期学習指導要領までは、約10年毎にやってくる中教審答申→教課審答申→学習指導要領告示のサイクルを抑えれば、向こう10年程度の教育課程の動きがわかりました。第8(9)期では直前に教育基本法改悪が強行されたことが大きな変化でした。そして現行第9(10)期については、学習指導要領が確定された後にそれを上書きするかのように経産省グループ提言、第3期教育振興基本計画、「令和の日本型学校教育」答申などが出ています。

梅原氏のような冷静沈着な研究者は全体動向を抑えながら個々の教育課程問題を論じ続けていますが、それでもおそらく個人では目配りできていないところもあると思います。

第8期頃までは私も、一通り答申文書等を読んで我流で批判を行なってきましたが、第9期以降もはやそれでは到底太刀打ちできないと考えるようになりました。政策文書分析において、教育課程関連領域の研究者の交流・連携が必要だと思えます。

しかし今回教育課程と評価分科会に参加して、教科研の分科会ではその議論は無理かなと思えました。教科研はいつでも現場教師の実践をととても大切にしており、教育課程のような幅広い領域に関する議論も常に実践を通して行ないます。今回もそうでした。とても大事な議論なんです、このスタイルでは霞ヶ関の動きはどうなっている？文科官僚は何を考えている？それにどう対抗したらいい？というような議論を入れていくことは無理なような気がします。

ではどこで議論すればいいのか？民研にも全教にも関わっていない私には見通しが立ちません。

ただ、このことと直接関わってではないのですが、今年に入って本田伊克氏(宮城教育大学)と積極的に交流するようになり、佐藤興文『学力・評価・教育内容』(1978)と一緒に読もうということに

なっていて、現在それぞれ準備中です。本田氏は教育課程と評価分科会世話人の中では梅原氏以外では唯一の教育課程研究者であると認識していますので、これからの相互交流に期待しています。

なお、教育課程政策分析と関わって昨年3月に書いた文章(京都教科研掲示板でも告知したと思います)を自分のブログに改めてアーカイブとして再録しました。不十分なものですが、ご紹介します。

教育学文献学習ノート(14)2018-2021 教育政策(関連)文書群 (2021.3.11-13 執筆)

<https://gamlastan2021.blogspot.com/2022/08/142018-20212021311-13.html>

2、近況報告(最近 考えたこと、体験談など自由に)

以下はお二人の報告をうけての自由論議です。録音おこしではありませんので不正確な所も多々あると思いますがご容赦ください。(吉益)

寺井: ことばと教育 言語の教育はどうなるのか? 芦田提起は重要だ。単に英語をどうするという問題ではないのでは、京都からの報告 古文の報告に注目があつた。約10名ぐらいの参加でした。

葉狩: 全国教研に参加 教育評価 発達の分科会に参加 広島の教師 北九州に 丁寧なかかわりに感心した。子ども観が凄い、奈良の書店 「本が売れない」と嘆いている。今後の方向をどうする? サークルからの学びが広島の教師のエネルギーらしい。自身の大学院の学びは教師教育の観点からどうするか考えている。全教の富田報告 日本型ショックドクトリンをどうみるのか、現場とのせめぎあいの理解 子ども保護者の生活がどうなっているのか 分析と運動の連帯、子どもが意見が表明しやすいようにという主旨の報告だった。

河内: 教育とは何かという本質的な問いを考えている。政策側に従順でいいのか 共通理解されてるか 太田堯の「教育の探究」感銘している。種の持続のため。根源的に大事では。偏差値教育はおかしい。環境が保持されているのか。大田提起を深めたい。生活綴方の再評価も大事ではないか。

井上: 国際平和ミュージアムの仕事 山の会 北穂高にチャレンジした。教科研との立ち位置の迷いがある。戦争と平和の問題 歴史教育との関連 日本社会教育学会で発表予定。次世代による戦争記憶継承 発表の準備 (高校生の主体的な参加に注目)地球温暖化に対する危機 意見表明できる意義 次世代の発表 平和ゼミナール 子どもが主体になる教育が中心では。

渡部: 聾学校 進路教育 職場体験 現場でのとまどい、その子の求める教育とは何か 時間がない 主体的対話的学び? 時間がない現実。退職教職員との対話をしている。特攻隊 覚せい剤を飲んで特攻に参加 テレビで放映 美談の裏に秘密があることがわかった。隠す体質が続いている。

佐藤: 平和ゼミ 1980年代 広島 高知 北海道 伊那 神奈川にあったのでは?

井上: 高知 幡多ゼミ 梅原ゼミ ブックレット 太田堯など調べたい。昔は温泉形の参加だったが コロナでオンライン参加 体力的に疲れるが企画の充実を感じる。若い人の参加はいいが 参加者のニーズはどこにあるのかさぐりたい。

寺井: 日本作文の会 1300人参加 30人ぐらいの分科会に参した。ハイブリッド型に 難しい オンラインと繋がらない 会場はもりあがるが 環境が整っていない気がした。

芦田： ともかくしんどかった。分科会は参加したが。ネット環境の問題と思う。

河内： 色々な大会に参加したが、他の交流が大事 じかにふれる大切さ アピール性がある。
発信の大切さを感じる。

寺井： オンラインの司会をやって、つっこんだ論議ができないなと感じた。全国大会では薄くなるような気がする。
教科研の全国大会の意義は？何を論議しているのかな？民間教研の意義は何か、問いたい、

太郎： なれないオンライン 苦手 自宅待機の子どもの対応が難しい アイパット参加の利点をおさえつつ。
基本は対面 空気感の共有が大事なのではないかと思う。

井上： オンライン会議が増えているが、久しぶりに合うと盛り上がる
戦争展 古本市 オンラインのよさを認めつつ リアルをどうするか考えたい。楽しみが消えてきた『教育』
インパクトがほしい気がする。議論が堂々めぐり。

葉狩： 温泉セットは魅力 今の状況ではしかたがないが。会議でハイブリット 議論が深まりにくい感覚がある。
基本は対面を大事にしたい。

芦田： 主体的な学びをどうとらえるのか 微妙な違いを知りたい

渡部： 何かしなければにおわれていて中味はどうなのか アイパットの活用だけか

佐藤： 例会に参加 途中の道程がひとつの財産に コミュニケーションの質が大事では
ここがマイナスな面 リモート それぞれのよさを活用したい。

寺井： 日常的なサークルのよさを大事にしたい、こういう小さなサークルこそ必要と思う

井上： リアルを大事にしたい。

山田： 性と教育の分科会が充実していたこと。教育のつどいに参加したことを(当日の参加が無理だったのでメ
ールで報告していただきました。)最近 出版された本の紹介がありました。資料 後述します。

『市民を育てる「公共」』 大学図書出版 1980 円(著者割引あり)

※60 回大会の感想は参加者の多くが企画がよくねられていておもしろかったのですが、オンラインで 2 時間参
加すると大変疲れるというのがこもごと語られました。年齢的なものもあるしコロナ禍もありしかたがないの
ですが、やはりリアル対面を重視して必要な所はオンラインで。この方向が実現できるといいですね。

連載・私の研究ノート (第 18 回)

神代健彦編『民主主義の育てかた 現代の理論としての戦後教育学』(2021) (その 8) 第
8 章 民主教育論 ― 身に付けるべき学力として (中村(新井)清二)

【5 回中の 5 回目】

佐藤 年明

(4) 城丸の「学力」概念

【「学力と人格」問題の焦点は、個人の思想の自由を保障することに注意を払いながら、人格・思想形
成に連なる、教育的指導のあり方を描くことでした。これまで見てきたように、城丸は、教科教育も教
科外教育も、行動との関係で、思想形成の目的を子どもたちに保障できるよう、注意深く教育的指導を
構想していました。

最後に、もう少し城丸のこの注意深さを吟味しておきたいと思います。そうしておくことで、より城

丸の議論の深さを見積もることになるとおもうからです。

吟味してみたいのは概括と指導の関係です。つまり、思想は、認識の概括のあつまりですが、認識の指導である学習指導は、概括もその対象であると理解してよいのか、ということです。もし指導対象だとすれば、学習指導が思想の自由を侵してしまいかねません。

この点に関わって、城丸は次のように述べます。「それ〔概括〕は、新しい事態を認識するうえでは方法論となり、行動とのかかわりにおいては見とおしと要求を生み出す。」(原著 P. 30)。これを図式化すれば、

認識－概括－行動

という関係になります。

繰り返しますが、城丸は、教科教育の指導では主として科学・文化・技能を内容とする認識を扱うものとし、他方、教科外教育の指導では主として行動を扱うものとし、

そして、ここが城丸理論の最大の特徴ですが、この認識と行動は互いに関係がない、別々のものとされてはいません。すなわち、二元論的に構成されてはいません。今見たように、双方の間に概括が置かれています。いわば、概括がその結び目となって、双方が関連し合うものとされているのです。

では、認識と行動は指導の対象ですが、概括はどうでしょうか。城丸は概括が指導の対象であると考えてはいないようです。認識と行動は、教科と教科外という指導の違いと結びついており、互いに還元し得ない、ある種の緊張関係にあります。概括はその緊張関係の真ん中に置かれています。したがって、概括は、いわば宙吊り状態にあり、常に揺れ動き、捉え難いものということになります。ひとの内面に属するそうしたものを対象として指導を具体的に構想することは容易くはありません—城丸は常に具体的な指導を考えています。したがって、概括はその緊張関係の中で形成されるものと理解するのが妥当なところでしょう。強いて、指導との関連について言えば、指導において「深い注意」が向けられるべきものと了解するのが妥当なところだと思います。

先ほど「学力という言葉は、学校教育として、しかるべき内容をわかち伝え、身につけられた能力という意味を含んで成立している」と述べました。いいかえれば、教育内容と能力を両睨みできるところに「学力」概念が成立することを意味します。これまで見てきたように、城丸は教育課程の二つの領域を、認識と行動の指導の違いとして把握していました。ここには「学力」概念があるとみて良いでしょう。つまり、認識と行動の指導において形成される、認識と行動の能力および両者を繋ぐ概括の三項からなる「学力」概念です。】(P. 229-231)

⇒ 中村氏によれば、「『学力と人格』問題の焦点」は「個人の思想の自由を保障することに注意を払いながら、人格・思想形成に連なる、教育的指導のあり方を描くこと」でした。そして中村氏は、この点での城丸の注意深さの例証として、最後に「概括と指導の関係」を取り上げ、そこから城丸の「学力」概念（記述のされ方から中村氏による推定の部分も含むと思われます）へと進みます。それは、中村氏が「教育内容と能力を両睨みできるところに『学力』概念が成立する」のであり「認識と行動の能力および両者を繋ぐ概括の三項からなる」と捉えるからです。

ただ私は、「学力」概念という《子ども側の事柄》（もちろん教師の指導をその形成過程において反映してはいますが）に行く前に、教師による指導のあり方にもう少しこだわりたいのです。

私は前回連載の末尾近くのコメントで、先走って「『認識の概括』（教科外活動においても教科学習においても）」として子どもによって表明されるものに対しても、教師はどのように受けとめるのか（受

容するのか、積極的指導をするのか、静観するのか etc.) をその局面局面で問われる」と書きましたが、中村氏がそのことに言及しているのがまさに上記の引用部分です。

中村氏によれば「認識」と「行動」は、それぞれ「教科」と「教科外」の指導に対応し、「互いに還元し得ない」「緊張関係」にあります。「概括」は「その緊張関係の真ん中」で「宙吊り状態」、「常に揺れ動き、捉え難いもの」としてあり、「ひとの内面に属するそうしたもの」について「指導を具体的に構想することは容易く」ない。だから、「概括はその緊張関係の中で形成されるものと理解するのが妥当」で、「指導との関連」は強いて言えば、「指導において『深い注意』が向けられるべきものと了解するのが妥当」だと。

子どもの思想の自由、思想形成の自由を一貫して大事にしながら、思想の構成部分である概括への教師の関わり方を考えるとき、上記に要約したような慎重な論の運びとなることは十分理解できるのですが、それでも子どもの「概括」への教師の関わり方について、疑問は残ります。中村氏は「指導を具体的に構想することは容易く」ないとしており、指導を構想すべきでないとか、子どもの「概括」に対して教師は「指導」という関わり方をすべきではない（子どもの思想の自由との関係で）とは述べていません。また、「深い注意」が必要だとしていますが、それは子ども自身の「概括」の営みについて、教師自身が認識し把握しておくこと（そして行動は起こさず静観しておくこと）を意味するのか、それとも注意を払うという教師のスタンスには、子どもに対する何らかの行動、働きかけを含んでいるのかについては書かれていません。

3. 城丸の民主主義教育論からさらに考えたいこと

中村氏は、本章の最後の課題を【民主主義の担い手を、学校教育を通じてどのように育てるのか】に【腐心した】その【城丸がたどり着いた場所から、わたし達はさらにどこに向かって進んだら良いのでしょうか】(P. 231)と設定した上で中内敏夫の学力論に言及し、【中内の学力論と比較すると城丸のそれを持つ特徴が浮かび上がります。】(P. 231)と述べています。

ただ、これに続く中内学力論の検討と城丸論との比較については、私の方にまだ理解のための十分な受け皿がなく、行論を引用するだけで終わりになってしまいそうなので、紹介を省略します。

私自身にはいま別の学習ノートとして取り組んでいる『能力と発達と学習 — 教育学入門 I』における勝田守一氏の学力論の再学習という課題があり、さらに、たぶん学生・院生時代に二度にわたり集中講義を受講した記憶がある中内敏夫氏の『学力と評価の理論』(1971)・『教材と教具の理論』(1978)・『指導過程と評価の理論』(1985)等の学習・再学習という課題も見通しています。それらを全部終わらせてからという段階論ではありませんが、中内学力論についてももう少し自分なりの理解を深めた上で改めて中村氏の中内・城丸比較を読んでみたいと思います。

さて、以上の文章の土台となった（後半はほぼそのまま使いましたが）私の「佐藤年明私設教育課程論研究室のブログ」への投稿「3 教育学文献学習ノート(22)-1 神代健彦編『民主主義の育てかた 現代の理論としての戦後教育学』(2021) はじめに(神代健彦)・第8章 民主教育論(中村(新井)清二)」(2021.9.3)に対して、中村氏から2021.9.6にコメントをいただきました。原文はMessengerで送信されてきた私信ですので、そのまま紹介することはできませんが、中村氏自身が理論的検討課題として受けとめて下さったことについては紹介してかまわないと判断し、紹介します。

それによると、学習と学習行動の区分について、その意味がなかなか腑に落ちないとの指摘も受けており、今後の課題として、概括、学習指導、授業展開、授業づくりと、いわゆる教授理論の本丸に接近しつつ、城丸の議論を考えていきたいとのこと。概括に「注意を払う」という言い方、「行動上の必要と見とおしのおきかえの手掛かりにいつかなるようにと期待しながら」とある「期待」という表現の辺りはまさに今後の課題と繋がっている。この辺りのことを、城丸に内在的にさらに解明できればと思っている。ただ、どこかで限界も出てくると予感もして、その時は城丸への批判を加えながら展開できればと感じている、とのことでした。

本連載における中村論文へのコメントについては、その前の神代論文検討において3月例会に間に合わせるためもあって連載2回分にまとめましたので、それに倣って中村論文についても連載2回分を充てるという方針でしたが、いざ「教育学文献学習ノート」からの再編集で連載原稿を書き始めると、とても2回分では足りないと思うようになり、結局5回分を充てることになりました。若い意欲的な教育学研究者たちの論と格闘する作業はとても楽しいものではあるのですが、単に読むだけでなく自分の意見も述べるとなると、連載読者が論者の主張を誤解してしまわれるような恣意的な引用はできないし、一方でただ紹介するだけではなくて自分の考えもきちんと述べたい、そうでないと「研究ノート」とは言えない、と考えていると、どうしても長い原稿になってしまいます。

今後も引き続き神代編『民主主義の育てかた』を取り上げ、第2章大日方真史論文（私事の組織化論）、第4章古里貴士論文（公害教育論）の順でコメントしていく予定です。それぞれに何回を要するか、書いてみないとわかりません。さらにまだ5章分が未検討のまま残っています。自分の専門から遠いテーマの論文もあり、自分に取り上げる力量があるかどうかの迷いと、残る5章については例えば連載1～2回分でこれまでよりはダイジェスト的な扱いで紹介することも考えていたんですが、ここまでの神代論文、中村論文検討の経験からとてもそのような軽いスタンスでは責任ある紹介ができないようにも思えてきて、どうしたらよいかまだ考え中です。

※その後 佐藤さんから連絡をいただき『民主主義の育てかた』についてはあと2回でまとめの予定です。（質問に答えてなど）

そのあと、勝田守一『能力と発達と学習』についての研究ノートの連載が始まります。ご期待ください。

連絡と掲示板活用と新連載企画について

① 例会の予定

10月例会 10月29日(土) 日本臨床教育学会開催のため第5土曜日開催です。

STOP 教職員の非正規化 II 提起 大西

11月例会 11月19日(土)

生活綴方自己表現 提起 北川健次さん(滋賀)

第2特集執筆者の北川さんがオンライン参加していただきます。

※10,11月はオンラインと同時開催の予定です。

時間は6時半～ 乙訓教育会館の予定です。

12月例会 12月17日(土) 関西教科研の企画に合流予定

場所は新町会館の予定です。詳細は後日お知らせします。

②HP掲示板の補強について

京都教科研でクリックしていただくとHPが開きます。会員の方などの自由な意見交換の場として「**京都教育科学研究会交流掲示板**」を補強してみました。

URLは次の通りです。 <http://www3.ezbbs.net/38/kyoukakenkyoto/>

通信に対する質問 意見など自由な交流の場として活用の予定です。どなたでも投稿できます。

③通信の新規連載企画 3人で隔月ごとに連載

教科研のこれまでこれからが終了しました。事務局3人で連載を担当します。

渡部さん(代表)の教室日記・現場からの発信(仮題)

井上さんの 博物館・資料館探訪、登山展望、大学での教育実践(仮題)

大西さんの 放課後の子ども・青年・大山崎の住民運動など(仮題)

次号から順番に掲載します。ご期待ください。

読書・映画・DVD・CD 情報（趣味的ですいません）

- ① 戦後教育学の再検討(下) 堀尾輝久他 東京大学出版会
教養・平和・未来というサブタイトルで15本の論文が掲載されている。どれも読みごたえがあるのだが、戦後教育学の何を再検討し、何を継承するのか、戦後教育学批判に対して譲ってはないものは何か、それは戦争責任でありどのような思想が大事なのかとわれているように思った。問いを明確にしてじっくり読み深めたい。
- ② 確執と信念 松永多佳倫 扶桑社
プロ野球という組織の中で、自らの信念をつらぬくと、時としてチームから孤立したり不本意なトレードや引退が「強要」される。江夏、谷沢、田尾、門田、広岡という実に個性的な5人との魅力的な対談集。選手としても超一流だったが、その生き方が味わい深い。
- ③ 三屋清左工門残目録(再読) 藤沢周平 文春文庫
30年前に読んだ時と今読んだ時の読後感が違う、というより今だからわかるような気がする。北大路欣也主演のテレビドラマが好評でそれにつられて再読した。「再読してよかったな」と思った。いわゆる武士の定年後、隠居生活の日々を問う。
- 〇 いわさきちひろ～27歳の旅立ち～ ドキュメンタリー 2012 映画
いわさきの淡い水彩画は独特で多くのファンがあるが、その絵の原画を残すために激しくたたかった、いわさきちひろがいたからこそ今のちひろ美術館があるのだと改めて思った。いわさきとかかわりのあった人たちの語りをつなぐドキュメンタリー映画。

編集後記・よもやま話

※安倍元首相の襲撃から1カ月がすぎようとしている。国民の思いを無視して「国葬」を決定した岸田首相。その疑問の声と統一協会（国際勝共連合）と自民党との癒着の構造に対する批判もまた大きくなってきた。戦後、岸首相が関係をもち、その後の自民党支配に大きな影響をもっていることが明らかになってきた。高校時代の同級生が勝共連合にかかわり「行方不明」になっているし、友人が京都府知事選挙のピラマキで暴力をうけたこともあった。悪徳商法、オカルト集団の実態、その被害の本質を明らかにしていかなばと思う。日本の政治の闇を曖昧にしないためにも。

※夏の教科研大会は完全オンライン。例会の感想にもあったが面白かったが、画面に集中するのは大変疲れる。便利なものは活用しつつその限界も認識しながら今後の方向を模索したい。私事だが12年間の教科研副委員長の任を石本さんに引き継いでいただいた。今後は京都の活動を地道に続けたい。色々な応援に感謝。

※夏休み京都下鴨の古本市に参加した。前後して京都のラーメンの激戦地とよばれるラーメン街道（一乗寺）をぶらぶらしてみた。いったお店は長蛇の列。まったかいもあり美味しかった。近くの名物書店 恵文社一乗寺店にも立ち寄り至福の時間をすごした。